

福岡カトリック神学院：京・江戸・博多、そして巴里：23

南野，森
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7344016>

出版情報：福音宣教. 78 (1), pp.4-5, 2024-01-01. Oriens Institute for Religious
バージョン：
権利関係：





福岡カトリック神学院の聖堂と本館（聖堂は2021年6月13日、本館は2023年11月21日、いずれも筆者が撮影）。

京・江戸・博多、そして巴里

南野 森●憲法学者

23 福岡カトリック神学院

11月21日、聖マリアの奉獻の記念日に、福岡カトリック神学院（旧サン・スルピス大神学院）で年に1度の「感謝祭ミサ」が捧げられた。サン・スルピス司祭会がケベックから来日したのは1933年、ちょうど90年前である。そして1948年、地方神学校として聖座から認可されて以降、75年にわたり、主として九州の教会の司祭養成がこで行われてきた。哲学と神学を修め司祭に叙階された卒業生は300名近くに及び、現役の司教団メンバーでは、前田万葉枢機卿、中村倫明大司教、白浜満司教、中野裕明司教、森山信三司教が卒業生であられる。

福岡大学にもほど近い福岡市城南区の人口密集地を車で走っていると、突如として、歴史を感じさせる大きな木々に囲まれて中の様子を窺うことのできない一角が現れる。門を入ってしばらく進むと、綺麗に手入れされた芝生の美しい広場と運動場が広がり、その向こうの小高い丘の上に、これまた歴史を感じさせる西洋風の白亜の3階建て、威風堂々の建物が、長い両腕をまつすぐ真横に広げるようにそびえている。神学生の学び舎であり、養成者と寝食を共にする住まいでもある。急勾配の屋根は赤茶色の瓦が美しく、所々に出窓があるのでおそろく屋根裏部屋もあるのだろう。あるいは4階建てなのかもしれない。古典主義建築を得意とする福岡県出身の建築家、徳永庸（いさお）（1887・1965）の設計である。

その右端に、校舎から少し離れて、上品な聖堂がある。こちらは1953年建立だから、今年で70周年。資金難から22カ所の窓は当初は曇りガラスだったそうだが、銀祝を迎えた卒業生から寄附金を得て、1977年から90年にかけてドイ

ツ製の美しいステンドグラスが順次嵌められていった。都会の真ん中とは思えない、祈る者を静かに落ち着かせる、包容力のある素敵な聖堂である。

感謝祭ミサは、この聖堂で捧げられた。前田枢機卿のほか、10名の司教、神学院の牧山強美院長に加え、司祭は70名ほどおられただろうか。例年に比べ司祭団の数が多かったのは、一つには、半世紀にわたり神学院で教鞭をとりつつ新共同訳聖書の刊行にも尽力されたゼノン・イエール神父が本年8月にモントリオールで99歳で帰天されてから初めての公的追悼の機会でもあったからで、もう一つには、この感謝祭ミサが、今回で最後になるからでもあったろう。

多くの司祭や司教を輩出し、日本のカトリック教会に巨大な貢献をしてきた福岡の大神学校は、今年度末で閉校となる。どのような議論がなされ、どのように決断されたのか、私などには知る由もないが、多くの卒業生（私の所属教会の現主任司祭も前主任司祭もそうである）が、自分たちが長年学び暮らした母校がなくなってしまうことに大きな寂しさを覚えておられるであろうことは容易に想像がつくし、院長を始め今日まで養成に携わってこられた方々は、文字通り断腸の思いなのではないだろうか。私自身、こんなに近所だったのに、どうしてもつと前からもつと近づかなかったのかと思っている。後悔は先に立たない。

召命の減少は日本だけではないが、それでも、物質文明至上主義のもと、格差や分断、孤立が拡大するなかで、心の安らぎを求め彷徨う人は日本でますます増えているように思う。働き手はますます必要なはずである。



みなみの・しげる●九州大学法学部教授。京都市生まれ。洛星中・高等学校、東京大学卒業後、同大学大学院、パリ第10大学大学院を経て、2002年九州大学助教授、14年教授。AKB48の内山奈月との共著で好評を博した『憲法主義』（PHP文庫）ほか著書多数。